

異世界の未踏査領域で
地図師として転生した
元占い師の Ω が探検隊
長 α に「お前の身体を
地図のように隅々まで
記す」と突然 α 覚醒し
た隊長にテントの中で
番にされる話

「ひ……あ……っ♡」

声が漏れた。制御なんて効かない。さっきまで地図の等高線について議論していた口から、こんな甘ったるい音が零れるなんて。

「……声を出すな。テントの外に聞こえる」

ガゼルの声が低い。いつもの無感情な報告口調じゃない。何かを——堪えている。

（やだ……首触られたただけなのに……身体が、勝手に……っ）

ヨルトは自分の身体の異変を感じていた。ペンダントの魔石が粉々に砕けてから、たった数十秒。全身から汗が噴き出し、視界がぐらつき——身体の奥で、今まで感じたことのない場所が、じわり♡と疼き始めている。

「隊長、テントから——出て……っ」

「出られない」

ガゼルの瞳が、金色に光った。

暗いテントの中で、灰色だったはずの瞳が獣の色に変わっている。ヨルトの喉がひくりと鳴った。

「俺は——αだ。たった今、そうなった」

「……………マジで？」

「冗談を言える状態に見えるか」

見えない。ガゼルの額には汗が浮かんでいる。テントの支柱を掴んだ拳が白い。革手袋の縫い目が軋む音。いつも無表

情で、地図の等高線が0.1ミリずれているだけで静かに怒る男が——全身で何かに耐えている。

テントの中に二つのフェロモンが混ざり合う。甘くて重い。布地を透過するように濃い。

「あ、は……っ♡♡ なに、これ……隊長の匂いで……身体がっ……」

腰が勝手に揺れる。自分の意思じゃない。身体が——男だった前世の自分が見たら絶叫するような反応を、勝手にしている。

「や、やだ……っ♡ 前世は男だったのに……こんなの……っ」
「ヨルト」

「え……あ、あ……っ♡♡」

ガゼルの手が、ヨルトの肩を掴んだ。押し倒すというより——崩れ落ちるように覆い被さってきた。191センチの身体がテントの天井をたわませる。視界がガゼルで埋まる。

「……俺が触れたら、もう止まらない。本当にいいのか」

声が震えている。この男の声が震えるのを、初めて聞いた。

涙目で、それでも冗談を言おうとする。前世からの癖だ。深刻な空気を笑いで壊す——占い師時代の処世術。

「よくないけど……隊長が触んなくても、俺もう止まんないっぽい……です」

ガゼルの理性が落ちる音がした。

「——なら、お前の身体を地図のように隅々まで記す」

「うえ……っ♡♡ そういの、このタイミングで言うの、ずる——んんっ♡♡♡」

服を剥がされた。測量するように正確な動きで。鎖骨をなぞり、胸の起伏を確かめ、脇腹のくびれに指を沿わせる。ガゼルの指は太くて硬い。日焼けした皮膚がざらついていて——前世で誰にも触られたことのない場所を、丁寧に、執拗に辿っていく。

「ほんとに等高線描いてる……っ♡ そこ感度高い、やっ……♡♡」

ガゼルの指が乳首に触れた。

ヒート中のΩの身体が爆ぜる。

「ひ……っ♡♡ 嘘、乳首でこんな……前世の俺は胸毛の心配しかしてなかったのに……っ♡♡」

「標高の高い地点を確認した」

「……っぷ、ふ……測量やめ……あっ♡♡ 笑わせないで♡♡ 笑いながら感じるの訳わかんない……っ♡」

ガゼルの指が乳首を挟む。ヒートで過敏になった突起を、親指の腹でぐりっ♡と捏ねた。

「お……っ♡♡ やだ、乳首硬くなって……男のくせに、こんな……っ♡♡」

（認めたくない。身体が感じてることを、認めたくない。俺は——前世では、男だったのに）

でも身体は正直だった。乳首を弄られるだけで腰が浮く。ぞくぞくと快感が背骨を這い上がり、脳を痺れさせる。ガゼルの指が触れた場所から——自分の知らない感度が、次々と掘り起こされていく。

「ここは——未踏査領域だな」

ガゼルの手が腹を撫で下ろし、腰骨を越え、内腿に触れた。

ヨルトの脚がびくんっ♡と跳ねる。

「ま、待って……そこは……っ♡♡」

「止まれない。言ったはずだ」

指先が脚の付け根に到達する。すでに蜜が滲んでいる場所に。

（嘘だろ……前世で占いブースに座ってた時には想像もしなかった。男の身体にあるはずのない場所から、とろり♡と粘い液が溢れてる）

「あ、あ……っ♡♡ やだ、もう濡れて……前世の俺が見たら死ぬ……もう死んでるけど……っ♡♡」

ガゼルの指が一本、ゆっくりと入った。

「お……っ♡♡♡ ……ッ♡♡ な、なに……指だけで、こんな……っ♡」

中が異常に熱い。きつい。なのに蜜でぬるぬると指を呑み込んでいく。Ωの身体がαの指を歓迎するように——内壁がきゅう♡と吸い付いた。

「中の地形を確認する」

「確認って言い方しないで……っ♡♡ あ、あ♡ 指、動かさないで……っ♡♡」

ガゼルの指がゆっくりと動く。中を探るように、壁をなぞるように。もう片方の手がヨルトの項腺を撫でる。

ぐちゅ……くちゅ……♡

二重の刺激にテントの中で水音が響いた。

「ひゅ……っ♡♡ 音、出てる……聞こえちゃう……っ♡♡」

静寂の山中。標高が高く、虫の声すらない。テント一枚隔てた向こうに、副隊長や護衛兵がいる。その中で響く卑猥な水音が、ヨルトの羞恥を煽った。

「お、お……っ♡ そこ、なんか……奥のほう……っ♡♡」

ガゼルの指先が、中のある場所を擦った。

甘い火花が散る。背中が弓なりに反った。

「ひあっ♡♡♡ そ、そこだめ……っ♡♡ なんか変になる……身体が勝手に……っ♡♡♡」

（やだ……やだやだやだ……気持ちいい……指だけなのに……こんなの、前世の俺が知ったら泣く……）

ガゼルの指が2本になる。ぐちゅっ♡と蜜が溢れて太腿を伝った。

「ヨルト。……中が、俺の指を離さない」

「だ、だって……身体が勝手に……っ♡♡ 俺のせいじゃ……おんっ♡♡♡」

テントの布地がばたばたと風に鳴る。焚き火の爆ぜる微かな音。その静寂の中、ぐちゅ♡ぐちゅ♡という水音だけが際立っている。

ヨルトの意識が朦朧としてきた頃——ふいに、ガゼルの手首を掴んだ。

ガゼルが動きを止める。

「……何だ」

「隊長」

「……」

「俺の身体ばっか調査して、自分ののは放置なんすか」

息を切らしながら、笑う。涙と汗でぐちゃぐちゃの顔で。

「αに覚醒したばっかの隊長の身体も、未踏査領域でしょ」

ヨルトの手がガゼルの股間に伸びる。ズボンの布地を押し上げるほど硬く膨張したそこに、直接触れた。

「……っ」

ガゼルの喉から、低い獣のような唸りが漏れる。

「あ、隊長も声出るんだ。よかった、人間だった」

一瞬だけ攻守が逆転する。ガゼルの身体が強張り、瞳の金色が濃くなる。フェロモンが跳ね上がり——テント内の空気が一変した。

ヨルトの身体が瞬時に反応する。腰から力が抜け、内腿がひくつく。

「あ……っ♡♡ 匂い……濃くなっ……♡♡♡」

「——触るな。次に触れたら、止められない」

「もう止まってないでしょ……っ♡」

ガゼルの手がヨルトのズボンを引き下ろす。脚を開かせる。膝を肩に掛ける。蜜で光る秘所を、金色の瞳が見下ろした。

「……地形調査を開始する」

「それ言うの好きすぎ——おおっ♡♡♡」

挿入。

ガゼルのαの性器がヨルトの中に沈んでいく。ヒートで柔らかくなった内壁が、きつく締め付けながらも迎え入れる。熱くて、でも蜜のおかげで——ずるり♡と、奥まで。

「おおあ……っ♡♡♡ む、むり、おっき……い……奥まで……っ♡♡」

一気に根元まで。

ヨルトの目から涙が溢れた。痛くはない。むしろ——空虚だった場所が埋まる感覚に、全身が震えている。

(なにこれ……痛くない……のに泣いてる……充たされてる……こんなの知らない……)

前世の記憶が叫ぶ——こんなの普通じゃない。

今世の身体が応える——もっと欲しい♡

「ひっ、あ、あっ♡♡ テント揺れてる……外から見えた……っ♡」

「見えない。暗い」

「そういう問題じゃ——あっ♡♡♡ そこ、奥、だめ……っ♡♡」

ガゼルの腰が深く打ち込まれる。

ぽんっ♡ぽんっ♡

肉が打ち合う音がテントに反響する。支柱が軋む。地図が散乱する。寝袋がずれる。

「あっ♡ あっ♡ ああ……っ♡♡ やば、声出ちゃ……外に……っ♡」

ガゼルの手がヨルトの口を塞ぐ。指の隙間から甘い声が漏れた。

「んっ♡♡ ぐ……っ♡♡ んんん……っ♡♡♡」

(気持ちいい……だめ……気持ちよすぎる……男だったのに、こんな……奥で、なにか火花みたいな散って……♡♡)

ガゼルの腰が加速する。テントが目に見えて揺れている。外で副隊長が何か言っている気配がするが、もう聞こえない。

「んっ♡♡ んぁ……っ♡♡♡ 隊長、奥……っ、奥すごい……っ♡♡♡」

ガゼルがヨルトの口から手を離す。代わりに、唇を首筋に落とした。項腺の近く——だが項腺そのものは避けて。

「番にはしない」

突き上げながら、ガゼルが言った。声が掠れている。

「ヒートを鎮めるだけだ。項腺には触れない」

(……ああ、隊長、理性が残ってるんだ。αに覚醒したばかりなのに……この人、こういうところが……)

「ありがと……ございます、隊長……っ♡♡ う、ん、でも腰止めてくれないと、お礼もまともに——あっ♡♡♡」

ガゼルの腰が一際深く打ち込まれる。ヨルトの奥のある場所を突いて——甘い絶頂の波が一気に押し寄せた。

「ひぁっ♡♡♡♡ おぁ……っ♡♡♡ い、っ……♡♡♡」

ガゼルがヨルトの奥で射精する。まだノットは膨張していない——α 覚醒直後で不完全だ。でも中に注がれる熱に、ヨルトの指がガゼルの背中を搔いた。

テントの布地を叩く風の音と、二人の荒い呼吸だけが残る。

「……占いの的には……っ、これで今月の厄落ち完了……ですかね……」

「……眠れ」

ガゼルが隣に横たわる。背中を向けた。

ヨルトは寝袋を引き上げて、まだ火照った身体を丸めた。
中にガゼルの精が残っていて——動くたびにぬるり♡とした
感触がして、顔が熱くなる。

(……終わった。一回で終わった。番にはならなかった。大
丈夫)

そう自分に言い聞かせて、目を閉じた。

数時間後。

目が覚めたのは、身体の奥の疼きだった。

さっきより、ずっと熱い。

(嘘でしょ……まだ終わってない……っ)

身体の奥が脈打つように疼いている。腰が勝手に揺れる。
寝袋の中で太腿を擦り合わせてみるが、全く足りない。

(だめ、足りない、全然足りない……なんで……一回したの
に……)

指を入れてみる。ガゼルの精がまだ中に残っていて、ぬる
り♡とした感触に——喉から声が漏れそうになった。必死に
口を押さえる。

ぐちゅ……くちゅ……♡

(音……っ。静かすぎるから音が……隊長に聞こえたら……
っ)